

# 琉球大学学術リポジトリ

子宮頸がんステージIB・IIに対する放射線療法後または広汎手術後の性機能障害

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2014-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ハーディング, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/29027">http://hdl.handle.net/20.500.12000/29027</a>

(別紙様式第3号)

## 論 文 要 旨

論 文 題 目

Radiotherapy or Radical Surgery Induced Female Sexual Morbidity in Stage IB and II Cervical Cancer

(子宮頸がんステージ IB・II に対する放射線療法後または広汎手術後の性機能障害)

氏 名 ハーディング 優子



【背景・目的】子宮頸癌の主要治療は、年齢、全身状態、合併症の有無、臨床進行期などに応じて、手術療法あるいは放射線療法が選択される。治療に伴う合併症として、リンパ浮腫、排尿・排便障害、放射線腸炎・膀胱炎、腔壁の癒着・閉鎖、性交障害、女性ホルモン欠落症状などがあるが、その診断と管理は、患者QOLの観点から非常に重要である。その中で治療後の性機能障害の評価はこれまで疎かにされてきた。外科侵襲や放射線照射は、腔や腔周囲組織を中心とする骨盤内臓器の萎縮や拘縮を引き起こし、また癌罹患、癌治療それ自体が精神的に影響を及ぼし、性機能低下を引き起こすと考えられる。

近年、わが国では20～40歳代で子宮頸癌の罹患率増加が報告されており、治療後の性機能障害への対策は、ますますその重要性を増していくと考えられる。今回、その管理法や予防策の改善のため、治療後子宮頸癌患者の性機能を治療法別に健康女性と比較し、その

実態把握を目的に本研究を行った。

【方法】自記式アンケート調査による観察・横断研究を行った。琉球大学附属病院で広汎子宮全摘術(RS)あるいは根治的放射線療法(RT)が施行された臨床進行期IB期、II期の子宮頸癌患者で、2011-2012年に治療後経過観察のために外来を受診した175人、ならびに対照群として521人の健康女性を対象として、アンケート用紙を配布した。有効回答は子宮頸癌患者92人(RS群、RT群各46人、回収率53%)、健康女性148人(回収率28%)から得られた。性機能はFSFI(Female Sexual Function Index: 性機能指標)を用い欲求・興奮・潤滑・オーガズム・満足・疼痛からなる6つのドメインスコアと総スコアにより比較検討を行った。なお、本研究は本学臨床研究倫理審査委員会で承認され、調査前に対象者から文書同意を得た。

【結果】対象者の年齢中央値は、RT群51歳(範囲27-72歳)、RS群44歳(範囲28-68歳)、健康女性43歳(範囲30-66歳)であった。FSFI総ス

コアの中央値は、RT群で5.5点（範囲3.6-34.7点）、RS群で18.9点（範囲3.4-31.2点）、及び健康女性で22.1点（範囲2-34.2点）と、RT後の性機能は健康女性との比較において有意な低下を示した（ $p < 0.001$ ）。各ドメインスコアに関しても、RT群ではすべてのドメインで健康女性と比較し有意な低下を認め、「興奮」、「潤滑」、「オーガズム」、「疼痛」の各スコア中央値は0点（範囲0-6.0点）で、高度の性機能障害の存在が示唆された。一方、RS群ではFSFI総スコア、ならびに「疼痛」以外の各ドメインにおいては、健康女性との比較において有意な低下を認めなかった。

【結論】子宮頸癌の治療後、特に放射線療法後の女性において、性機能低下は重大な問題であり、カウンセリングやリハビリテーションを考慮する必要がある。